この夏、被爆地から福島の被曝を思う

THIS SUMMER, I THINK THE EXPOSURE OF FUKUSHIMA FROM THE BOMBED CITY

核エネルギーの利用に対する被爆地からの思いと願いは、非人道性であることと廃炉や事故処理の難しさから、核兵器の廃絶と脱原発社会の実現となります。

この夏広島と長崎の原爆被爆者慰霊祭では、両市長の平和宣言により、核不拡散条約再検討会議で共同提案された核兵器の非人道性を訴える声明に署名をしなかった日本政府の行為に、失望と怒りが列席した安倍首相に浴びせられました。この宣言では、毎年核不拡散のみならず核兵器の廃絶が求められていますが、残念ながら効力を発揮しているとは思えません。その理由は、わが国が核の傘を利用するとともに、敗戦処理や歴史認識をあいまいで変則的に済ませ、周辺諸国が納得し共有できる理解と認識に達していないからです。

福島での原発事故の放射能による作用と環境汚染は深刻で、広島と長崎の被爆被害は今も持続しています。問題の一つは住民の生活と健康への影響と損害に対する補償にあり、対処方法はすでに度重なる水俣裁判などの経験からほぼ定まっているにもかかわらず、迅速にすすまずいまなお多くの人々が耐え忍んでいます。この問題の構図は、加害者側が、被害者の訴えや心配を無視し、原因をすり替え、責任を回避し、謝罪を拒み、事態を矮小化し、補償の額を値切り、収束を宣言しようとしていることにあります。被害には心の痛みや発がんなどを伴うので、簡単に決められるものではありません。しかし、被害者に安心が得られるように対処するには、すでに学んでいるように、補償委員会に被害者を加え、期限を切らず、賠償の枠組みに弾力を持たせ、何かあったらいつでも対応するとすることです。

福島でのもう一つの心配は、これまでの事故に加え最近の高濃度放射能汚染水漏れと、ほとんど報道されないのですが専門家の多くが危惧しているメルトダウンした核燃料の再臨界

原爆ドーム

(核分裂連鎖反応)で、これは震災直後において偶然回避されたとされる危機であり、いずれも不安の募る問題です。

問題はいずれも解決していないのですが、主因として人々の関心度が大きく関与していると感じます。いずれも難しい問題で解決の道は見えませんが、この夏わが国でも「もうひとつアメリカ史」で話題となったオリバー・ストーン監督が広島にこられ、これらに関する示唆に富む発言をしています。①原子爆弾の投下は戦争の早期終結に必要だったとする定説は間違いであり、都市に対する破壊力の実験とソ連の封じ込め戦略であり、アメリカ人として謝罪したいこと。②核廃絶を含む日本の平和運動に対して、日本はアジアへの加害責任に向き合っておらず、犠牲者の立場に立つ視点に欠けていること。③監督自身5－6年前までヒロシマの歴史を知らなかったことを反省し、学べば意識は変えられること、広島を忘れてはいけないこと、正しく記憶しておくことの大切さなどであった。問題の解決と改善には、だれもが傍観者であってはならず、学び続け責任ある行動を必要とするという重い指摘だった。

山本禎紀 SADAKI YAMAMOTO 広島大学名誉教授

第22回WARD総会

22TH WARD GENERAL MEETING REPORT

総会は、4月29日、東京都中央区銀座の紙パルプ会館で、銀座ミツバチプロジェクト「銀ぱち」(WARD誌36号で紹介)の協力を頂いて開催された。13時30分に開会、2012年度活動及び会計報告(別記)、2013年度活動計画及び予算案の議決後、未来社会に貢献している人達(別記)に感謝状が贈られた。臨席された「さくら並木」ネットワークの桜野良充氏には直接表彰委員会の松香光夫会長から感謝状と記念品が贈呈された。又、同氏と、一緒に出席された同代表の細沼忠良氏から、東日本大震災の大津波の惨事を伝承して子孫の命を守るため、大津波の最高到着地点に100年以上生きる桜を植え続けている活動などについてお話頂いた。この後、意見交換、WARDのスローガンを唱和して、14時40分に閉会した。

尚、当日は、銀ぱち主催のイベント「ファーム・エイド銀座2013・春」があり、総会後、みつばち見学会、はちみつ試食、ミツバチフォーラム等に参加させて頂いた。

2012年度会計報告

FINANCIAL REPORT 2012

2012.4.1～2013.3.31　単位 円

1.

収入の部	予　算	決　算
繰越金	521,018	521,018
会　費	400,000	288,520
寄付金	450,000	380,000
雑収入	28,000	1,540
合　計	1,400,000	1,191,078

2.

支出の部	予　算	決　算	
会報費(印刷・発送)	300,000	248,990	
会議費	130,000	70,145	
事務所費	360,000	360,000	寄付
備品費	10,000	0	寄付
消耗品費	10,000	0	寄付
通信費(電話・郵便)	40,000	50,460	
交通費	10,000	0	奉仕
印刷費	30,000	0	寄付
宣伝費	150,000	0	
調査費(文献他)	30,000	0	奉仕
感謝状贈呈費用	50,000	40,000	
雑費	40,000	0	
活動援助費	80,000	50,000	
繰越金	160,000	371,483	
合計	1,400,000	1,191,078	

※備考:WARD基金(2002年設立)1,000,000円は別途積み立ててある。

2013年度感謝状贈呈

CERTIFICATE OF APPRECIATION FROM DESCENDANTS

4月29日の総会で、未来社会に貢献している次の人達に、WARDから感謝状が贈られた。
尚、後日各氏から丁寧な礼状を頂いた。

1. Dr. Amory B. Lovins (米国)

物理学者で、ロッキーマウンテン研究所創設者・会長。各国政府機関や世界の大手企業のアドヴァイザーを務め、主に先進エネルギーや資源効率について助言している。化石燃料から再生可能エネルギーへの転換は可能であることを理路整然と示し、世界のエネルギー戦略を牽引して、地球環境の保全に貢献している。WARD41号書籍紹介欄の「新しい火の創造」は各国で広く読まれている。

2. 吉原 毅

城南信用金庫理事長。信用金庫の使命に基づき、3・11の大震災後、被災地支援を幅広く行っている。福島第一原発事故で、立ち入り禁止区域にある同業者の店舗の半数が閉鎖になり、大きな衝撃を受け、原発の危険性を黙認した責任を痛感し、「脱原発」を宣言した。原発に頼らない安心できる社会を目指して、積極的に発言し、様々な実践活動を精力的に続けている。

3. 西辻一真

(株)マイファーム創業者。日本農業が疲弊して耕作放棄地・休耕地が増えている傍ら、スローライフ・安心安全な作物への欲求が高まっていることに着目し、「自産自消」できる社会をつくり、耕作放棄地を再生するソーシャルビジネスを拡大している。具体的には、耕作放棄地を農業体験農園として区画整備し、指導・管理サポート付の貸農園事業などをして、農業者(家庭菜園を含む)を増やしている。

4. Dr.Thomas E.Lovejoy (米国)

ジョージ・メイソン大学環境科学・政策専攻教授。「地球の肺」といわれるアマゾンの熱帯雨林で長年に亘って生態系の調査を行い、危機に瀕している種の減少とメカニズムを明らかにし、全世界に知らしめた。1980年には「生物多様性」という言葉を生み出し、「種の絶滅予測」を発表した。人間の活動が種の絶滅を加速している事実を広く伝え、地球環境保全に貢献している。

5. 坂田 明

ジャズサックス奏者、東京薬科大学生命科学部客員教授、タレント、俳優、ミジンコ研究家、「山下洋輔トリオ」に参加し、現在まで世界中のジャズフェスティバルに出演。音楽とミジンコが命で繋がるという持論を展開し、命に畏敬の念を持ち、命をしっかり生きることを言葉と音楽で表現している。今年出版された「私説　ミジンコ大全」は高い評価を受けている。

6. 桜野良充

イギリス・ブラッドフォード大学院で平和学を学び、その後、フリーランスのファッション・自然写真家として活躍。(株)Grand Photo 代表。東日本大震災直後から、被災地に入り撮影、調査。予てからつきあいのあった園芸・造園業者との協働によって、被災地の支援に関わるようになった。特に、津浪の到達点にサクラを植樹するNPO法人さくら並木ネットワークの創設に関わって、支援を続けている。

米国コロラド州にあるAmoryさんの私邸、自然エネルギー、断熱材、採光、省エネ機器を取り入れて、持続可能性を追求した家

感謝状贈呈者推薦募集

RECOMMENDATION RECRUITMENT OF APPRECIATION PRESENTER

WARDは、活動の一環として、未来社会に貢献している世界の個人及び団体に、子孫に代わって感謝状を贈り、一層の活躍をお願いしています。対象は、NGO活動、技術開発、教育、著書及び企画、行政、マスコミ、環境改善企業などです。推薦方法は、贈呈先の名称、住所並びに推薦理由を記入の上、WARD事務局に提出して頂きます。締切は各年1月末日です。WARD表彰委員会で選考し、総会で贈呈します。贈呈品は感謝状(外国人には和文と英文)と記念品です。未来からの感謝状は特に外人に好評です。